

東海道五十三次を往く

第27回

吉田宿

市電が走る町 豊橋に宿場町の面影をたどる

幕府の要職を勤めた吉田藩の城下町であり、豊川の船運で栄えた湊町を合わせた大きな宿場の一つであった。「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖が」と詠われるほどのにぎわいをみせ、本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠65軒を擁した。戦火等により、当時の面影はほとんど失われている。広重が描いたのは普請中の吉田城と吉田大橋（豊川橋）。屋根の上で働く職人が、橋を行く大名行列を眺めている様子が興味深い。



広重が描いた吉田大橋は、岡崎の矢作橋、瀬田の唐橋とともに東海道三大大橋とされている。写真に見える橋は現在の豊橋で、画の吉田大橋の上流70mの場所に位置するもの。画の構図は広重の空想と思われる。



市電が走る町「豊橋」。東海道五十三次の中でも、特ににぎわった宿場であったこの地だが、駅前大通や国道1号は広く改修されている。写真右手の通りが旧東海道。

江戸から数えて34番目となる「吉田宿」。豊橋市のほぼ中心部となる宿場町をミスモ編集部が巡りました。

秋葉山常夜灯

宿の東入口は東八丁目交差点あたりで、北東側広場にある大きな秋葉山常夜灯が目につく。高さは5.03mで豊橋市内には70余基の秋葉山常夜灯が確認されているが、5mを超えるものは他にないという。昭和19（1944）年に起きた三河地震で倒壊したが、平成13（2001）年にこの地に復元されたという。



東惣門

東八丁目交差点の西南角には東惣門の復元（上）。往時、門の傍らには番所・駒寄せ場があり、朝六ツ（午前6時）から夜四ツ（午後10時）まで開門され、それ以外の時間は一般の通行は禁止されていたとのこと。現在は、人気の和菓子店「もちや」が傍に（下）。戦後の区画整理後、この場所に店を構えたという。



吉田宿本陣跡

宿の中心である札木町交差点には本陣跡の石碑があり、創業120年余の鰻料理「丸よ」が営業を続けている。江戸時代、同店のルーツとなる割烹料理店が鰻の宣伝をしようと「顔別嬪」とだけ看板に掲げたところ評判に。後に鰻に限らず極上品を「べっぴん」と言うようになり、明治中期には特別に美しい女性を表す言葉になったという。



丸よ

秘伝の焼き方で皮にもっちり味を染み込ませた鰻。そのこだわりを示すため皮を上にした独特の盛り付けで供される。

愛知県豊橋市札木町50
☎0532-52-4987
🕒11時30分～20時30分 ㊟水曜



吉田城

豊川沿いの豊橋公園内に立つ。建築時の名称は今橋城。天正18（1590）年に池田輝政が入封して城を拡張し、吉田城と改名した。堀と野面積みの石垣は当時のもので、隅櫓が復元されている。

愛知県豊橋市今橋町3
☎0532-51-2430（豊橋市観光振興課）
🕒10時～15時
吉田城鉄櫓の内部公開／外観見学は随時可
㊟月曜



おみやげ



ゆたかおこし
しっとりした細かい粒のおこしで、上品な抹茶餡を包んだ創業来の菓子。表面には豊川を舞う浜千鳥をデザインした愛らしい刻印が。



黄色いゼリー
井上靖が自伝小説「しろばんば」の作中「口に入れると溶けるように美味かった」と記したゼリーの復刻版。日向夏の生果汁と甘夏の実を入れたさわやかな一品。

若松園
愛知県豊橋市札木町87番地
☎0532-52-4641
🕒8時～19時 ㊟水曜

